
土地分類基本調査

高見山・大台ヶ原

5 万 分 の 1

国 土 調 査

三 重 県

2 0 0 0

序 文

本県では、限られた資源である県土を有効に利用していくため、県土の持つ自然的条件の実態を総合的に把握することを目的として、昭和61年度から国土調査法に基づく都道府県土地分類基本調査を実施しています。

この調査は、国土地理院発行の縮尺5万分の1地形図を基図として、土地の自然的条件（地形、表層地質、土壌等）及び利用現況を科学的且つ総合的に明らかにしようとするものです。

今回は、平成9年度の「高見山」「大台ヶ原」の成果を取りまとめました。

本成果が、土地利用諸計画をはじめ、環境保全計画・防災計画等策定の基礎資料として広く活用されることを希望するとともに、調査の実施にあたって御協力をいただいた関係各位に深く感謝の意を表します。

平成14年3月

三重県地域振興部長 井ノ口 輔 胖

まえがき

- 1 この調査は、土地分類基本調査関係の各作業規程（総理府令）に基づき作成した「都道府県土地分類基本調査作業規程（三重県）」により、実施したものである。
- 2 この調査の成果は、国土調査法施行令第2条第1項第4号の2の規定による土地分類基本調査図及び土地分類基本調査簿である。
- 3 調査基図は、測量法第27条第2項の規定により建設大臣の発行した5万分の1地形図を使用したものである。
- 4 調査の実施、成果の作成機関及び担当者は次のとおりである。

調査担当者

指 導	国土庁土地局国土調査課		
総 括	三重県地域振興部県土利用・水資源・流域圏推進チーム		
地 形 分 類 調 査	三重大学人文学部教授	目 崎 茂 和	
	三重大学人文学部教授	岩 田 修 二	
表 層 地 質 調 査	三重大学名誉教授	山 田 純	
	高田短期大学教授		
土 壌 調 査	三重県農業技術センター	安 田 典 夫	
	三重県林業技術センター	野々田 稔 郎	
土地利用現況調査	三重大学人文学部助教授	安 食 和 宏	
水系・谷密度調査	三重大学教育学部教授	森 和 紀	

目 次

序 文
まえがき

総 論

I 位置及び行政区画

1 位 置	1
2 行政区画	2

II 地域の概況

1 人 口	4
2 主要産業の概要	5
(1) 就業構造	
(2) 農 林 業	
(3) 商 工 業	

各 論

I 表層地質	9
II 土 壌	
1 農地土壌	14
2 林地土壌	19
III 土地利用現況	21

總論

I 位置及び行政区画

1 位置

本調査対象地域は、三重県の西南部に位置し、その範囲は図-1に示すとおりであり、建設省国土地理院発行の縮尺5万分の1地形図「高見山」「大台ヶ原」図幅のうち、三重県域内である。

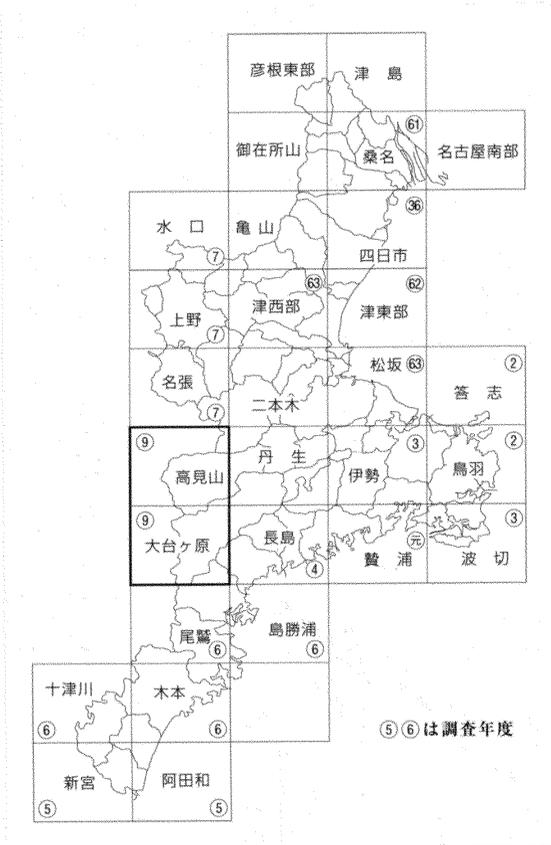


図1 位置

2 行政区画

本調査対象地域の行政区画は、図-2に示すとおりであり、飯南郡飯高町、多気郡宮川村、北牟婁郡紀伊長島町、海山町、一志郡美杉村の3町2村からなっている。

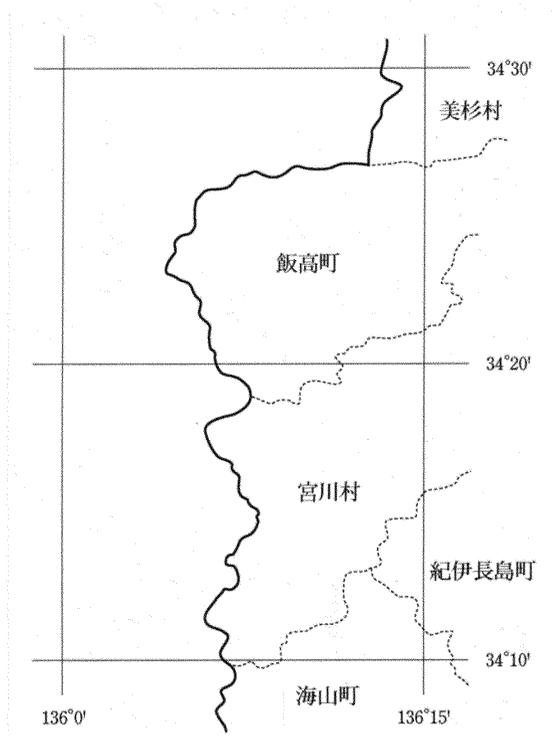


図2 行政区画

II 地域の概要

本地域は、本県の南西部に位置し、大台ヶ原山や高見山などの山々が台高山地を形成し、起伏の多い急傾斜が多く深い渓谷をなしています。

地域には宮川をはじめ清流が多く渓谷美を有する山々と豊かな森林資源を有し、吉野熊野国立公園に指定されています。

山岳部を中心とした山並を形成している地理的条件は、多角的な土地利用及び産業への展開を困難にし、交通網など社会資本の整備にも課題をかかえており地域の社会・経済環境に大きな影響を与えている。

1 人 口

調査地域内の3町2村の人口は38,485人（平成7年国勢調査人口を基礎として推計）で県人口の2%を占めている。

本地域の町村では、人口は引き続き減少しており、県全体の人口増加傾向と反比例して、過疎化、高齢化が進んでいる。

表 1 人 口

(単位：人、%)

区 分 市町村名	人 口 の 推 移		世 帯 数 の 推 移		人 口 増 減	人 口 増 加 率
	2 年	11 年	2 年	11 年		
美 杉 村	8,835	7,259	2,808	2,774	-1,576	-17.8
飯 高 町	6,457	5,564	1,941	1,885	-893	-13.8
宮 川 村	4,374	3,979	1,468	1,457	-395	-9.0
紀伊長島町	12,356	11,212	4,225	4,300	-1,144	-9.3
海 山 町	11,307	10,471	3,978	4,008	-836	-8.4
地 域 計	43,329	38,485	14,420	14,424	-4,844	-11.2
県 計	1,792,514	1,863,903	546,117	596,909	71,389	4.0

2 主要産業の概要

(1) 就業構造

本地域の産業別就業人口は、第一次産業15.2%、第二次産業37.4%、第三次産業47.3%であり県平均と比較すると第一次産業の割合が高く、第二次産業は同水準で、第三次産業の比率が低くなっている。

表2 産業別就業人口

(単位：人、%)

区分 市町村名	総数		第一次産業				第二次産業				第三次産業			
	2年	7年	2年		7年		2年		7年		2年		7年	
			人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
美杉村	4,573	4,069	710	15.5	643	15.8	1,994	43.6	1,591	39.1	1,867	40.8	1,832	45.0
飯高町	3,176	2,983	539	17.0	522	17.5	1,440	45.3	1,273	42.7	1,197	37.7	1,181	39.6
宮川村	2,091	1,977	412	19.7	366	18.5	874	41.8	786	39.8	805	38.5	822	41.6
紀伊長島町	5,960	5,829	940	15.8	837	14.4	2,110	35.4	1,952	33.5	2,910	48.8	3,030	52.0
海山町	5,274	5,046	818	15.5	657	13.0	1,871	35.5	1,838	36.4	2,583	49.0	2,548	50.5
地域計	21,074	19,904	3,419	16.2	3,025	15.2	8,289	39.3	7,440	37.4	9,362	44.4	9,413	47.3
県計	897,976	948,971	66,786	7.4	61,609	6.5	355,104	39.5	355,048	37.4	474,467	52.8	529,942	55.8

出典 国勢調査報告（各年10月1日現在）なお、総数は調査不詳分を含む。

(2) 農 林 業

調査地域内の耕地面積（1,645ha）は、県全体の2.4%であり、農業粗生産額については、27億9800万円で、1.98%である。

市町村面積に占める耕地面積は、1.6%であり、県平均の12.1%に比して著しく低く、地盤的条件によるものである。

地域内の森林面積は、92,756haであり、地域面積の占める森林面積の割合は、県平均の65.6%をおおきく上回っている。

表 3 産業別内訳（農業）

区 分 市町村名	市町村 総面積 (ha)	総農家数(戸)			耕地 面積 (ha)	農業粗 生産額 (百万円)	耕地面積/ 市町村総面積 (%)	専業農家/ 総農家数 (%)	耕地面積/ 総農家数 (ha)	農業粗生産額 /総農家数 (百万円)	農業粗生産額 /耕地面積 (百万円)
		専 業	兼業他								
美 杉 村	20,670	1,152	184	968	641	637	3.1	16.0	0.56	0.55	0.99
飯 高 町	24,094	712	98	614	345	644	1.4	13.8	0.48	0.90	1.87
宮 川 村	30,754	396	55	341	253	396	0.8	13.9	0.64	1.00	1.57
紀伊長島町	11,048	360	63	297	252	838	2.2	17.5	0.7	2.33	3.33
海 山 町	14,635	253	53	200	154	283	1.1	21.0	0.61	1.12	1.84
地 域 計	101,201	2,873	453	2,420	1,645	2,798	1.6	15.8	0.57	0.97	1.70
県 計	577,366	74,600	5,297	69,303	69,800	141,258	12.1	7.1	0.94	1.89	2.02

表 4 産業別内訳（林業）

区 分 市町村名	森林面積 (ha)	森林面積 市町村総面積 (ha)
美 杉 村	18,080	87.5
飯 高 町	22,604	93.8
宮 川 村	29,331	95.4
紀伊長島町	9,683	87.6
海 山 町	13,061	89.2
地 域 計	92,759	91.7
県 計	378,983	65.6

(3) 商 工 業

調査地域内の商業は、商店数932店、年間商品販売額4,495,000百万円で、県全体で占める割合は、それぞれ3.2%、0.9%である。

工業については、従業者4人以上の事業所数216企業、製造品出荷額36,204百万円で県全体に占める割合は、それぞれ3.5%、0.5%である。

表 5 産業別内訳（商業、工業）

区分 市町村名	商 業		工 業	
	商店数	年間商品販売額 (百万円)	事業所数	製造品生産数 (百万円)
美 杉 村	161	4,936	44	5,556
飯 高 町	117	4,072	46	7,871
宮 川 村	76	1,627	21	2,161
紀伊長島町	332	17,508	65	11,833
海 山 町	246	13,095	40	8,783
地 域 計	932	41,238	216	36,204
県 計	28,823	4,495,007	6,118	7,669,154

各 論

I 表層地質

1 表層地質概説

本図幅は紀伊山地の主脈の一つである台高山地の南側の橿田川、宮川の上流の溪谷の分布する三重県で最も急峻な山地の地域である。

図幅内においては北部の高見山を通過して橿田川の北部の高見山地の南側を東西に走る中央構造線があり、これより以北には内帯に属する領家帯が、以南は外帯に属する三波川帯、秩父帯、四万十帯が分布する。又、橿田川、宮川の兩岸には河成段丘堆積物、河川の低地は沖積堆積物の第四系が分布する。

領家帯は高見山地に分布し、本図幅内では花崗質岩及び変成塩基性岩類が見られる。

花崗質岩は花崗閃緑岩及びトータル岩、閃緑岩よりなり、主に粗粒で片状構造を持っている。

変成塩基性岩類は上記の花崗質岩中に岩体又は岩脈として見られ、粗粒・暗緑色で片理を示さない。

三波川帯は三波川結晶片岩よりなり、泥質起源の黒色片岩、塩基性火山碎屑岩起源の緑色片岩、桂質岩起源の石英片岩よりなる。本図幅では大部分は黒色片岩の分布である。

秩父帯は三波川帯と御荷鉾^{みかぼ}構造線を境としてその南に分布する。

秩父黒帯は北帯と南帯（三宝山帯）に区分され、中帯を欠いている。北帯は一般に緑色岩、チャート・砂岩の繰り返しで、泥岩・石灰岩をはさみ、南帯と北に緩傾斜の宮川断層で境する。南帯は主として厚いチャートと砂岩よりなり泥岩・緑色岩・石灰岩をとまなう。

この秩父黒帯の年代はコノドント・放散虫・フズリナの化石により、二畳一ジュラ紀とされている。

四万十帯は秩父帯と佛像構造線で堺し同構造線以南に分布する。砂岩・泥岩の互層よりなるが、当図幅内では砂岩優勢で単層の厚さは数mに及ぶことがある。

第四系は更新統の河成段丘堆積物と完新統の現河床の沖積堆積物よりなる。

表 I - 1 地質系統表

地質時代			地層名	おもな岩質	表層地質区分
新 生 代	第 四 紀	完新世	沖積堆積物	礫・砂・泥	未固結堆積物
		更新世	低位・中位 段丘堆積物	礫・砂	
	第 三 紀	高見山酸性岩類	石英斑岩・花崗斑岩	固結堆積物・ 変成岩及び 火成岩	
中 生 代	四万十帯	砂岩・泥岩			
	領家花崗岩類	トータル岩・花崗 閃緑岩・閃緑岩			
	領家変成塩基性岩類	変輝緑岩			
中 古 生 代	三波川帯	黒色片岩・緑色片岩			
	秩父帯	チャート・砂岩・泥岩 緑色岩・石灰岩			

2 表層地質細説

2.1 未固結堆積物

本図幅では第四系の碎屑性堆積物である。

2.1.1 礫・砂・泥よりなる堆積物 (gsm)

宮川・櫛田川及びその支流^{はらす}蓮川等の現河川の谷底を埋めて形成する低地の沖積堆積物である。

2.1.2 礫を主とする堆積物 (tu)

櫛田川及び宮川に沿う河成の中位・低位の段丘堆積物を構成する礫層である。礫層の膠結物は砂質でルーズである。

2.2 固結堆積物 火成岩・変成岩

領家帯・秩父帯・四万十帯を構成する岩石である。

2.2.1 砂岩・泥岩 (SS)

四万十帯を構成する岩石で砂岩・泥岩の互層よりなる。砂岩は中粒～粗粒、新鮮なものは暗灰色で堅硬であるが、風化すれば淡褐色を呈しもろくなる。

泥岩は新鮮なものは青灰色であるが風化すれば淡褐色となり軟化する。

2.2.2 石英斑岩・花崗斑岩 (p)

楡田川上流の高見山に分布する酸性岩類であり、珪長質斑状の火成岩で、石英斑岩は斑晶に石英を主とし、時に正長石、雲母を含む。花崗斑岩は石基が微花崗岩様式のものである。

2.2.3 花崗閃緑岩・閃緑岩 (Gd)

領家帯に分布する花崗質岩で、閃緑岩は斜長石と角閃石を主とする深成岩で花崗閃緑岩は石英・黒雲母も含むもので、ここでは石英、閃緑岩（トーナライト）も含まれる。片状構造を示すものが多い。

2.2.4 変輝緑色 (Mb)

塩基性の火成岩で細粒・暗緑色を示す。構成鉱物は斜長石、角閃石、雲母よりなり、源岩のオフィティック組織が残されていることが多い。

2.2.5 黒色片岩類 (sb)

泥質起源の碎屑岩が三波川変成作用を受け石墨片岩・石墨千枚岩に変成し、黒色を呈する片岩類であり、本図幅では三波川帯の主要な分布を示す。この分布の中には緑沢片岩に変成した緑色片岩、石英を主とした石英片岩が挟まれる。

2.2.6 砂岩・泥岩・緑色岩 (sl)

砂岩は暗灰色で淘汰が悪く、時々泥質の基礎を含む堅硬な岩石であり、泥岩は黒色で剥離性に富む。緑色岩は塩基性火山性碎屑岩等で一般に緑色であるが赤紫色のものもある。

2.2.7 珪質岩 (チャート) (ch)

珪質の堆積岩である。一般に暗灰色のものが多いが、灰白色又は暗赤色のものが見られる。堅硬で浸食に屈いので露岩・岩柱としてあらわれ、山稜の骨格

を形成していることが多い。

2.2.8 石灰岩 (ls)

分布は小規模なものであるが、三重県地下資源調査報告書（昭和32年）のものも記入した。

参考文献

飯塚保五郎(1931)：7万5千分の1地質図幅「尾鷲」及び同説明書、地質調査所 12p.

飯塚保五郎(1932)：7万5千分の1地質図幅「野後」及び同説明書、地質調査所 32p.

端山好和 他(1982)：近畿地方東部の領家帯の地質—特に花崗岩の岩体区分と相互関係—地質、88、451—466.

中川圭二・市川浩一郎・市原 実(1987)：日本の地質6（近畿地方）、共立出版社 297p.

大平芳久(1982)：紀伊半島中央部・高見山北方地域の領家帯の地質、地質学雑誌 88、467—481.

山下 昇・粕野義夫・糸魚川淳二(1988)：日本の地質5（中部地方II）、共立出版社 310p.

熊野層群下部の大沼累層で基底近くは礫岩で構成されているが、主として砂岩・泥岩の互層を示す。

2.2.7 砂岩・泥岩 (Hu, Hℓ)

音無川層群の上部羽六累層の砂岩と泥岩の互層で同累層の上部 (Hu) は砂岩優勢、下部 (Hℓ) は泥岩優勢である。

2.2.8 泥岩 (Ur)

音無川層群の中部爪谷累層の泥岩である。暗灰色の泥岩である。

2.2.9 砂岩・泥岩 (Au)

音無川層群の下部阿田和累層の上層の砂岩・泥岩互層である。

2.2.10 泥岩 (Aℓ)

阿田和累層の下層の泥層である。

2.2.11 玄武岩・緑色岩類

阿田和累層中に見られるもので塩基性岩の玄武岩質溶岩である。

2.2.12 砂岩・泥岩 (Ru)

日高川層群の龍神累層の砂岩・泥岩で極めて堅硬な岩質のものである。

参考文献

- 荒牧重雄・羽田 忍(1965)：熊野酸性岩類の中部及び南部の地質、地質学雑誌 71、494-512.
- 田村俊和・片山秀五郎(1975)：熊野浦沿岸の海岸段丘と古土石流堆積物、第四紀研究、14 107-114.
- 山下 昇・細野義夫・糸魚川淳二(1988)：日本の地質5 (中部地方II)、共立出版、310p.

II 土 壤 図

1 農 地

(1) 農地土壌の概要

本地域は三重県の中央部に位置し、大部分が山地となっている。

農地はこれらの山地に囲まれ、極わずかに第三紀層山地・丘陵地、洪積台地および河川流域の谷底低地に分布している。

土壌の種類は丘陵地斜面、洪積台地上には黄色土が分布しており水田および普通畑として利用されている。ほぼ同様の面積で黒ボク土および多湿黒ボク土が分布し、黒ボク土は普通畑、多湿黒ボク土は水田として利用されている。橿田川の川筋に沿って、沖積谷底低地には灰色低地土が分布し、水田として利用されている。河川に沿っては極わずかに褐色低地土も分布する。

(2) 農地土壌の細説

本地域に分布する農地土壌は 5 土壌群、10 土壌統群、14 土壌統に分類される。(表III-1 参照)

ア 黒ボク土

台地、段丘中低位面の平坦地に広く分布し、山麓の崩積扇状地にも分布する。腐植層の厚さは25～50cmの範囲であるが、100cmをこえる厚層の場合もある。この腐植層は普通2～3層に漸变的に分化しており、第1層は腐植に富み、暗褐色～黒色である。第2層は暗色を呈し、細粒状であるが、ぼう軟・粗しょうである。腐植層は暗黄褐色の漸移層を経て、黄褐色の下層土となっている。下層土は強粘質で緻密な場合が多く、凹地では透水性が不良な場合がある。しかし、崩積性のものは、多くは下層が礫層であり、透水性は良好である。

一般に東海地方の黒ボク土は非火山灰起源とされるものが多く、本地域の場合も大半の母材は非固結堆積岩であり、洪積世堆積物の上部にイネ科植物の遺体が腐植となって集積したものである。

土地利用は普通畑、樹園地であり、作目は普通作物が多く、その他、茶、サツキ、植木、山林苗木などが栽培されている。

土壤は表層多腐植質黒ボク土、表層腐植質黒ボク土の2土壤統群に分類される。

イ 多湿黒ボク土

台地上の凹地、段丘上に分布し、一部は台地周辺の沖積低地にも分布がみられる。地下水位、またはかんがい水の影響を受けて土層中に斑紋を持つことを特徴とする黒ボク土である。

主として、に分布する。

土地利用は水田が多く、水稻が栽培されている。

本地域に分布する多湿黒ボク土の土壤統群名は表層腐植質多湿黒ボク土である。

キ 黄色土

丘陵地、洪積台地の平坦面および山地の傾斜面に分布しており、性質は赤色土と類似しているため、一括して赤黄色土と呼ばれることもある。本地域の土壤は赤色土と同様、第三紀層あるいは古成層の固結堆積物、洪積世堆積物を母材とし、表層の腐植含有量は低く、土色は5 YRよりもさらに黄色であり、赤色土と区別している。

本土壤は地域全体にわたって分布している。

土地利用は水田、普通畑、極一部が樹園地（茶）である。

本地域の黄色土は次層の土性および礫層の有無ならびに酸化沈積物の有無により、畑および樹園地利用の礫質黄色土壤、水田利用の細粒黄色土壤・斑紋あり、礫質黄色土壤・斑紋ありの3土壤統群に分類される。

ク 褐色低地土

河川流域の沖積低地に分布し、全層あるいはほぼ全層が黄褐色の土層からなる土壤である。沖積低地でも自然堤防等比較的高いところにあるため、後述の灰色低地土に比べて排水は良好であり、地下水位は低い。

本土壤は飯高町の櫛田川沿いにわずかに分布する。

土地利用は主として普通畑である。

褐色低地土は次層の土性および酸化沈積物の有無により、中粗粒褐色低地土壤・斑紋なしと中粗粒褐色低地土壤・はんもんありの2土壤統群に分類される。

ケ 灰色低地土

沖積低地に分布し、全層あるいはほぼ全層が灰色ないしは灰褐色を呈しており、下層に黒ボクまたは有機質層を持つものもある。母材は非固結水成岩で堆積様式は水積である。地形は海岸沖積平野、谷底平野などの平坦地であるが、後述のグライ土に比べ一般に地下水位は低い。灰色土層は当初の堆積物が地下水やかんがい水の影響によって変成したか、あるいはグライ層の酸化により生成したものと考えられている。灰褐色土層の成因もほぼ同様に考えられるが、この土層は灰色の土層よりも多少酸化的な条件下にあるものと思われる。また、この土壌は水移動の影響によって生成した斑紋やマンガン結核がみられる場合も多い。

本土壌は県下でも面積がもっとも多く、地域全体に分布している。

土地利用は大部分が水田である。

灰色低地土は次層の土性、礫層の有無、土色、腐植層や有機質層の有無によって、細粒灰色低地土壌・灰色系、中粗粒灰色低地土壌・灰色系、礫質灰色低地土壌・灰色系、細粒灰色低地土壌・灰褐色系、中粗粒灰色低地土壌・灰褐色系、灰色低地土壌・下層黒ボクの6土壌統群に分類される。

参考文献

- 1) 加藤芳朗、日本における陸成腐植質土壌の分類学的試論(1997)、42~57、ペドロジスト。
- 2) 地力保全基本調査総合成績書(昭和53年)、三重県
- 3) 土壌調査ハンドブック(昭和60年)、ペドロジスト懇談会編、博友社。
- 4) 土壌断面をどう見るか(昭和61年)、土壌保全調査事業全国協議会。
- 5) 農耕地土壌の分類—土壌統の設定基準および土壌統一覧表一、第2次案改訂版(昭和58年)、農業技術研究所。

(吉川重彦)

表Ⅱ-1 農耕地土壌分類

土 壤 群	土 壤 統 群	記 号	土 壤 統
黒ボク土	表層多腐植質黒ボク土壌	A-r	野々村統
	表層腐植質黒ボク土壌	A-h	大川口統、飯館統、船川統
多湿黒ボク土	表層腐植質多湿黒ボク土壌	AW-h	篠永統、市茂田統
黄色土	礫質黄色土壌	Y-g	形上統
	細粒黄色土壌・斑紋あり	Y-wf	北多久統
	礫質黄色土壌・斑紋あり	Y-wg	氷見統、風透統
褐色低地土	中粗粒褐色低地土壌・斑紋なし	BL-mc	芝統
灰色低地土	礫質灰色低地土壌・灰色系	GrL-g	迫子野木統
	中粗粒灰色低地土壌・灰褐色系	GrL-bmc	安木統
	灰色低地土壌・下層黒ボク	GrL-a	野市統

表Ⅱ 農地土壌分類一覧表

土 壌 群 名	土 壌 統 群 名	記 号
砂丘未熟土	砂丘未熟土	RS
多湿黒ボク土	表層腐植質多湿黒ボク土壌	AW-h
赤色土	礫質赤色土壌	R-g
黄色土	細粒黄色土壌	Y-f
	礫質黄色土壌	Y-g
	細粒黄色土壌・斑紋あり	Y-wf
	中粗粒黄色土壌・斑紋あり	Y-wmc
	礫質黄色土壌・斑紋あり	Y-wg
褐色低地土	中粗粒褐色低地土壌・斑紋なし	BL-mc
	礫質褐色低地土壌・斑紋なし	BL-g
灰色低地土	細粒灰色低地土壌・灰色系	GrL-f
	中粗粒灰色低地土壌・灰色系	GrL-mc
	礫質灰色低地土壌・灰色系	GrL-g
	細粒灰色低地土壌・灰褐色系	GrL-bf
	中粗粒灰色低地土壌・灰褐色系	GrL-bmc
	灰色低地土壌・下層黒ボク	GrL-a
	灰色低地土壌・下層有機質	GrL-o
グライ土	礫質強グライ土壌	G-gg
	中粗粒グライ土壌	G-mc

2 林地土壤

(1) 林地概要

本調査地は、北を東西に走る高見山地が東に向って次第に高度を減じていく。また、西には奈良県との境となる台高山脈が高見山 (1,249m) から国見山 (1,419m)、日出ヶ岳 (1,695m) へと南北に連なり大起伏山地を形成する。

台高山脈を源に櫛田川と宮川が平行して西から東に流れ、急峻な山地を形成し、本調査地は美杉村の一部、飯高町、宮川村の西部を含む。

飯高町のこの区域は褐色森林土壤が広く分布しており、昔から波瀬林業地として西隣の奈良県東吉野の影響を早くから受けスギ・ヒノキの人工造林が盛んに行われている。また、宮川村のこの区域は最西部は大台山系に広がる針葉樹天然林とスギ・ヒノキの人工造林が分布する。大杉谷周辺地域は急傾斜地が多く随所に滝や早瀬が見られる。この区域の表層土は薄く森林の生育に良い条件とはいえないが、豊富な降水量が、多様な植物の生育を促し、立派な森林を成立させている。

(2) 林地土壤の細説

調査地域内の林地に分布する土壤は、土壤断面形態の特徴、土性、堆積様式などの相違によって次のように分類される。

黒ボク土壤A
乾性褐色森林土壤 1B (dry 1)
褐色森林土壤B
黄色系褐色森林土壤Y
ポドゾルP
岩石地RL

ア 黒ボク土壤

火山抛出物または、その割合が比較的高い母材に由来し、黒色～黒褐色の表層の腐植層の厚さは50cm以内である土壤。山稜、山腹の緩斜面に点在する。

イ 乾性褐色森林土壤 1

乾性褐色森林土壤 1 は、内陸部の山地および丘陵地の尾根筋から山腹中部の

乾燥しやすい林地に分布する。FH層の下にA層の堆積があり、有効土層もある程度の厚さを有する。生産力は中程度であり、部分的にヒノキの良好な成長が期待できる。

ウ 褐色森林土壌

内陸部の山地および丘陵地の中腹以下の森林に広く分布する。水分条件は良好で、A層は腐植を含み、理水性に富む。有効土層は厚く、スギ、ヒノキの造林地が大半を占める。生産力は中～高位である。

エ 黄色系褐色森林土壌

丘陵性の山麓地や台地に散在し理水性、通気性は不良であり生産力は高くない。A層は腐植量が少なく、暗色を呈し、B層は彩度、明度とも高く黄色系を呈する。天然性の広葉樹林やアカマツ林が多く、スギ、ヒノキの良好な生長はあまり期待できない。

オ ポドゾル

高冷地帯の尾根筋の一部に出現する乾性ポドゾル化土壌である。F、H層は厚く溶脱層は不明瞭であるが、下層には赤褐色の集積層が認められる。大台山系に稜線の一部に分布し、生産力は低い。

カ 岩石地

露岩地および岩塊地など表層のほとんどない林地で大台山系に多い。

Ⅲ 土地利用現況

5万分の1地形図「高見山」「大台ヶ原山」図幅が対象である。この地域は、ほとんどが山地・丘陵地から成る。三重県を代表する2つの河川、すなわち橿田川と宮川の源流部に相当する。そして、奈良県との県境となる高山帯を含んでいる。

以下、この地域を構成する主な2町村、すなわち飯高町と宮川村について、資料をもとに検討する。

まず、両町村とも、宅地の占める割合は0.4%、0.2%と非常に小さい。集落は、谷底の盆地に立地しているのみである。

耕地の割合は、全体で1.1%である。飯高町の場合、耕地の中では、畑が田よりも多い。樹園地が割合みられるのは、この町が茶の産地だからである。逆に宮川村では、田が畑よりも多い。

森林は全体で94.7%と、非常に広い面積を占めている。針葉樹と広葉樹がまじら模様を成しており、県境の高山帯では混交林も広くみられる。森林の中では、人工林（全体の58.5%）が天然林（全体の35.0%）よりも広い。飯高町では人工林の占める割合が宮川村よりも大きい。人工林率（樹林地面積に対する人工林面積の割合）を計算すると、全体で62.6%である。飯高町は75.7%、宮川村は56.0%という状況である。これら2つの人工林率の違いは、橿田川と宮川流域それぞれの林業の歴史の違いを表している。

その他の土地利用としては、特筆すべきものはない。この図幅では、ゴルフ場等のレジャー施設はなく、また工業団地もみられない。

(安食和宏)

平成14年3月 印刷発行

土地分類基本調査（平成9年度調査）

「高見山」・「大台ヶ原」

編集発行 三重県地域振興部

県土利用・水資源・流域圏推進チーム

津市広明町13番地

電話 (059)224-2785

印刷 中央地図株式会社

東京都板橋区舟渡3丁目15番22号

電話 (03)3967-1781